原明美（音楽評論家） Akemi Hara

F. J. ハイドン：アンダンテと変奏曲 ヘ短調 Hob.XVII:6

古典派音楽の基礎を築いた作曲家として名高いF.J.ハイドン（1732-1809）は、鍵盤楽器のために数多くのソナタを残したが、変奏曲の分野にも注目すべき作品がある。なかでも親しまれている「アンダンテと変奏曲」は、自筆譜に1793年という作曲年が記されている。曲は、従来の変奏曲のように、主題→第1変奏→第2変奏……と進むのではなく、いわば二重変奏曲のように書かれている。アンダンテの主題のなかに、ヘ短調の部分（A）とヘ長調の部分（B）が含まれ、AとBが交互に変奏されてゆき、最後に再びAが回想されてからコーダで終わる、という構造である。そして、こうした緻密な構成で進むなか、素朴な味わいと華やかな彩りが交錯し、独特の魅力を放っている。

モーツァルト：ピアノ・ソナタ 第8番 イ短調 K.310

天才作曲家W.A.モーツァルト（1756-91）のピアノ・ソナタとして現存する最古のものは、彼が19歳のころの作品である。神童と呼ばれたモーツァルトにしては意外に遅いが、その理由としては、彼が当時の習慣に従って、当初はヴァイオリンつきのピアノ・ソナタの形で、この分野に着手した経緯がある。しかし、こうした事情は別として、彼の残した約19曲のピアノ・ソナタは、古典派のピアノ・ソナタの基本的な様式を確立し、そのなかにモーツァルトらしい明るく流麗な楽想を盛りこんだ作品として、ピアノ音楽史上、重要な位置を占めている。

一方、モーツァルトのピアノ・ソナタの大半は長調だが、K.310は、彼が初めて短調で書いたピアノ・ソナタであり、パリ滞在中の1778年に作曲された。その滞在中に母を失うという不幸にあったモーツァルトは、同じころにホ短調のヴァイオリン・ソナタ（K.304）も作曲した。そして、短調によるこの2つの作品には共通して、当時の彼の悲しみや苦悩が、刻まれていると考えられよう。曲は、3つの楽章から成る。

第1楽章：アレグロ・マエストーソ。イ短調、ソナタ形式。主題の付点リズムが、独特の重圧感や緊張感をかもし出し、その気分は楽章全体を支配している。

第2楽章：アンダンテ・カンタービレ・コン・エスプレッショーネ。ヘ長調、ソナタ形式。内に秘めた感情が滲み出たような楽想を持ち、展開部では劇的な高まりも見せる。

第3楽章：プレスト。イ短調、ロンド形式。切迫した雰囲気を持つロンド主題を中心に展開する。簡潔な書法で進むなかに、情熱の発露も感じられる。

ブラームス：6つの小品 Op.118、4つの小品 Op.119、幻想曲集 Op.116より

渋く重厚な作風を特色とするドイツ・ロマン派の作曲家、J.ブラームス（1833-97）の作品のなかで、晩年に書かれた4種のピアノ曲集（「幻想曲集（全7曲）」Op.116 、「3つの間奏曲」Op.117 、「6つの小品」Op.118 、「4つの小品」Op.119 ）は、特に寂寞として枯れた味わいを含んでいる。ブラームス最後のピアノ作品となったこれらの曲集は、彼がたびたび避暑に訪れていたイシルという地で、1892年に作曲されたと考えられているが、全部で20曲の小品が、どのような順序で書かれたかは不詳である。各曲は簡潔な形式でまとめられ、そのなかに、晩年のブラームスらしい成熟した作曲技法が凝らされている。さらには、彼自身の心の奥深くにある思考や、感情の吐露、たとえば回顧、躊躇、諦観なども、反映されているように感じられるのである。今回は、Op.118、Op.119、Op.116から、全部で5曲が選ばれ、以下のような順序で演奏される。

6つの小品より 第3番「バラード」ト短調 Op.118-3

アレグロ・エネルジコ。主部は勇ましいリズムにより、エネルギッシュで迫力に満ちている。一方、抒情的な美しさに満ちた中間部は、しばしの休息、あるいは望郷の念を表すかのようだ。

4つの小品より 第3番「間奏曲」ハ長調 Op.119-3

グラツィオーソ・エ・ジョコーソ。おどけた味わいを含んだ、明るく軽快な曲ながら、皮肉めいた、どこか醒めたような表情も、見え隠れしている。一方、技巧的な工夫も注目される。

4つの小品より 第2番「間奏曲」ホ短調 Op.119-2

アンダンティーノ・ウン・ポコ・アジタート。寂しげな表情が際立つ主部も、中間部のゆったりとしたワルツも、共に、ブラームスの追憶あるいは回顧の念を、味わい深く表現している。

6つの小品より 第2番「間奏曲」イ長調Op.118-2

アンダンテ・テネラメンテ。静かなたたずまいのなかにロマンティックな美しさを湛えた佳曲である。和声付けを変えて繰り返し現れる、その美しい主旋律は、感動的でもある。また、中間部に見られる切ない表情も、強く印象に残る。

幻想曲集より 第1番「奇想曲」ニ短調 Op.116-1

プレスト・エネルジコ。エテュード風の書法による、激しく情熱的な1曲。なお、全部で7曲から成るOp.116は、曲集としては「幻想曲集」と名づけられているが、その内訳は、「奇想曲（カプリッチョ）」が3曲と、「間奏曲（インテルメッツォ）」が4曲である。

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第29番 変ロ長調「ハンマークラヴィア」Op.106

古典派の大作曲家L.v.ベートーヴェン（1770-1827）の作品のなかで、作品番号のついたピアノ・ソナタについては32曲が残されており、19世紀の音楽家H.v.ビューローが「ピアノの新約聖書」として賞賛したように、音楽史上に輝かしい金字塔を打ち立てた。この32曲においてベートーヴェンは、多彩な技法を盛りこむと共に、各楽章の形式を充実させ、あるいは拡大させて、その構成と内容に新しい境地を切り開いていったのである。

初期・中期と、独自の作風を展開させつつピアノ・ソナタの様式の転換を図ってきたベートーヴェンは、第29番「ハンマークラヴィア」を含む後期のソナタにおいて、さらに大胆かつ創意に満ちた工夫を凝らし、従来のソナタ形式の枠を越えて、即興的さえ帯びた作品を完成させるに至った。第29番は、彼のピアノ・ソナタのなかでも特に大きな規模と内容を誇る力作であり、その第2版に自身が「ハンマークラヴィアのための大ソナタ」と記したことから、「ハンマークラヴィア」の名で呼ばれる。1817年から1818年にかけての間の作と推定され、1819年に出版されたこの作品は、ベートーヴェンのパトロンでありピアノと作曲の弟子でもあったルドルフ大公に献呈された。曲は、4つの楽章から成る。

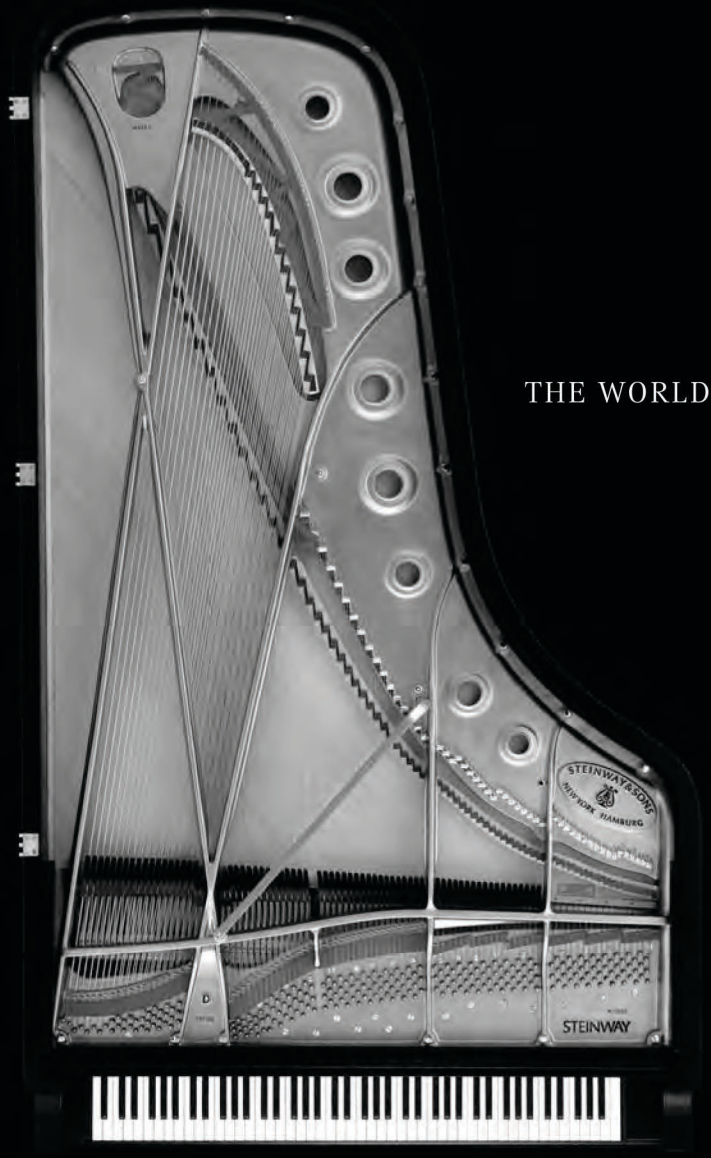
第1楽章：アレグロ。変ロ長調、ソナタ形式。第1主題は、かなり多くの素材から構成され、壮大かつシンフォニックである。一方、ト長調に転じての第2主題は、優しく語りかけるような表情を持つ。そして展開部において、第1主題によるフガートが繰り広げられた後、再現部を経て、コーダで締めくくられる。

第2楽章：スケルツォ：アッサイ・ヴィヴァーチェ。変ロ長調、3部形式。同一のリズムが繰り返される主題が、変奏されながら続く。なお中間部では、変ロ短調の簡素な主題がカノン風に扱われる。

第3楽章：アダージョ・ソステヌート。嬰ヘ短調、ソナタ形式。ソナタ形式とはいえ、構造上の区分よりも、旋律の無限的な発展が重視された緩徐楽章である。

第4楽章：ラルゴ～アレグロ・リゾルート、変ロ長調。ラルゴによる即興的な序奏の後、フーガの書法を用いたアレグロ・リゾルートの主部となる。この主部は、自由かつ大規模なフーガであり、複雑な構成をとるなかに、緊張感と力感に富んだ音楽が展開される。そして、大きな盛り上がりのうちに、この長大なソナタを閉じる。

STEINWAY & SONS



THE WORLD'S FINEST PIANO

Steinway & Sons Japan, Ltd.
Tel：03-5251-6550 www.steinway.co.jp